



女性科学者・加藤セチ

北星学園創立百周年記念館

矢島 あづさ

北星に勤めながら 北大に挑戦

大正時代に北大最初の女子学生、理化学研究所の女性研究者第一号となった加藤セチをご存じでしょうか。当館に理研が企画した「映像評論加藤セチ吸収スペクトルで物質を探る」のビデオがありますが、今まで収納棚の奥に眠っていました。

そのビデオを観るきっかけは、つくば市在住の加藤祐輔さんから「セチが教師として北星に勤めていた頃の資料はありますか？」と問い合わせがあったからです。加藤さんは、セチの遠い親戚にあたり、札幌北一条教会のオルガニストの経験も持ちでした。現在は、国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構で、セチと同じ科学者の道を歩まれています。

ビデオには、北星に勤めていた頃の写真が、学園から提供されていました。それが左の写真です。



1921年3月 教師写真 加藤セチ(前列左)

で父も亡くし、継母キン、姉フミ、妹マサと生き抜くために、セチは教師になることを決意。山形女子師範学校へ入学し直し、小学校の先生として働き始めます。ところが、上京して自活したキンから「東京へ出て勉強なさい。人間は若い時でできるだけ勉強して置

セチの北星在職期間は1918～1921年。数学、物理、化学、体育まで教えていました。勤めた年の夏、東京女子高等師範学校の後輩らを北大へ案内し、佐藤昌介総長が「北大は女子に門徒を閉ざしていない」と口にしたのを耳にし、すぐに入学を願いました。

ところが「学力が足りない」という理由で二度も断られ、セチは憤慨します。「私の学力が足りないのは教育制度が悪いから。女性にも大学の門戸を開くべき」と強く抗議しました。その熱意に大学側は根負けし、教授会は入学を認めます。当時、女性が帝国大学で学ぶことは全国でも珍しく、札幌中の話題となりました。

生活のために教師の道へ

1893年、セチは山形の豪農に生まれましたが、酒田大地震により母、兄、姉を亡くします。生家も破壊され、巨額の負債を抱えたまま15歳



理研で女性初の主任となったセチ
提供：理化学研究所

かないと、後で必ず後悔する時がくるから」と繰り返し手紙が届きます。そこで、セチは東京女子高等師範学校で学び直し、卒業後は「給料が最も高い」札幌の北星高等女学校に勤めたのです。

北星でセチはどんな教師だったのでしょうか。「同窓會々誌 第十二號」を開いてみると、卒業生の原ふみ子書いた「室蘭同窓會集ひ」に手掛かりを見つけました。室蘭に嫁いだセチの姉・岡本フミ宅で同窓會が開かれ、原は「加藤せつ子先生は時々休暇を利用して室蘭の御姉様へお出になります。學界に身を捧げていらつしやるわけであつて何時も斬新な氣分で生々と御出になる御様子は誠に羨ましく思われます。今後の婦人はあれ位まで進取的に行かなければならぬと常に刺激を受けて居ります」と綴っています。



同窓會々誌 第十二號(1921年2月発行)

下宿先の 前川徳次郎とは？

同誌の職員住所録には「札幌北七條西三丁目 前川徳次郎方 加藤節」と記載されています。前川は北大植物園に勤務し、のちに園芸学の教授となった人物です。当時の北星は北4条西1にありましたが、北星にも北大にも通いやすい場所に下宿していたのでしょう。

北大に残る履歴書の住所には「北三条西三の一 道祖土(さいど)寅吉方」と書かれているとか。この下宿から、通勤通学により便利な場所へ引越したのかもしれないと推測。加藤さんに確認すると「セチは、北大造園学の教室で、星野勇三教授の研究室に属し、卒論まで書いています。星野が前川宅への下宿を紹介したとすれば、よく付合します」とのこと。



加藤セチ 提供：理化学研究所

セチは後輩の女性たちに「科学者として、女性、男性を問題にする考えはおかしい。私は北大でも、理研でも、どこでもそんなことを気にせず仕事をしてきた」と励ましたそうです。私からセチの研究を解説することはできませんが、少しでも興味を持たれたら、どうぞ記念館にあるビデオを観にきてください。